

Economic Monitor

中国と日本の名目 GDP の再逆転はあるか？

7～9 月期の大幅な円高により日中の名目 GDP は拮抗。更なる円高進行となれば、日中 GDP が再逆転する可能性もあり。但し、2010 暦年では中国が日本を逆転することはほぼ確実。

季節調整を施さない原系列において、2010 年 4～6 月期に中国の米ドル換算名目 GDP が、日本の名目 GDP を上回った。原系列は事実としては正しいのだが、先行きを考える上では、両国の経済変動の季節性の違いを無視して原系列同士を比較しても、何の示唆も得られない。そこで、季節調整値（日本は内閣府公表値、中国は当社試算値）を米ドルに換算した上で日中の名目 GDP を比較すると、2010 年 1～3 月期で既に中国が日本を 1.9%、4～6 月期では 8.2% 上回っている。季節性を考慮すれば、1～3 月期から中国の名目 GDP が日本を凌駕していた可能性が高いと言える。4～6 月期の両国の GDP の差の拡大は、中国経済が人民元建てで前期比年率 17% 程度と堅調なペースでの拡大を続けた一方で（人民元の対ドルレートはほぼ横ばい）、日本経済はデフレもあり名目 GDP が円建てで年率 2.5% 縮小、更には円安によりドル換算値が 5.7% も目減りし、ドル建名目 GDP が 8.1% もの大幅縮小となったためである。

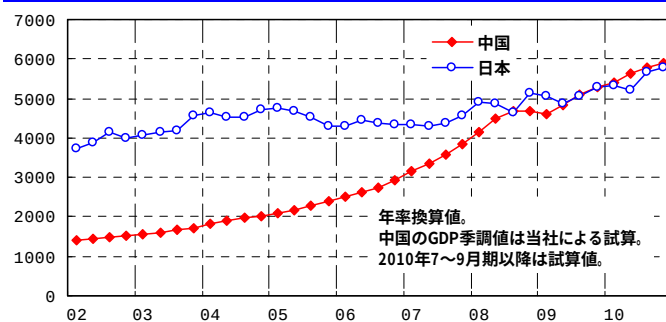
但し、4～6 月期と異なり、足元の 7～9 月期は大幅な円高が進んでおり、為替換算によって日本のドル建て名目 GDP は大きく膨らむ。果たして、日中の名目 GDP が再逆転する可能性はあるのだろうか。以下では幾つかの仮定の下で 2010 年後半の両国の名目 GDP を試算してみた。

【仮 定】

- ①日本経済にはついては当社予想通りに成長（7～9 月期前期比年率 3.5%、10～12 月期▲1.4%）、中国経済については前期比年率 8% で成長。
- ②GDP デフレーターは両国ともに前期比ゼロ% で、名目成長率と実質成長率が一致。
- ③為替レートは、ドル円が 4～6 月期平均 92 円→7～9 月期 85 円→10～12 月期 83 円
人民元の対ドルレートは 4～6 月期 6.82 元→7～9 月期 6.78 元→10～12 月期 6.78 元で推移。

②と③の仮定は中国 GDP について厳しい、つまりは GDP を小さめに見積もる内容である¹。この仮定に基づく、7～9 月期は大幅な円高が寄与し両国のドル建て名目 GDP は、中国が日本を 1.6% 上回る程度までに格差が縮小するが、10～12 月期もその格差は維持され、日中の名目 GDP 再逆転は生じない。但し、10～12 月期に仮定を上回る大幅な円高が進めば、日中の名目 GDP は再逆転する可能性がある。①と②及び③の人民元レートに関する仮定を踏襲した場合、10～12 月期にドル円レートが 81.7 円より

中国と日本の名目 GDP (10 億ドル、季節調整済系列)



(出所) 日本内閣府、中国国家统计局

¹ CPI 動向から判断する限り、中国の 7～9 月期デフレーターは前期比プラスと考えられる。また、10～12 月期にも緩やかな人民元の増価が続けば、ドル換算の名目 GDP は押し上げられる。

も円高であれば再逆転が生じる。あり得ない為替レートではないが、その際には、日本の名目GDPは仮定よりも更に落ち込んでいる可能性がある。なお、10～12月期にドル円レートが81.7円となっても、当社試算では、2010年暦年合計では中国の名目GDPが日本を3%程度上回る。2010暦年での日中の名目GDPの逆転は揺るぎそうにない。